

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

特集「近世日本における〈北方〉イメージ」について：「北方」という郷土に生きる：安倍佐市『入田付昔語集』をめぐって

著者	伊藤 龍平
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	16
ページ	218(37)-192(63)
発行年	2019-03-29
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00021871">http://doi.org/10.15002/00021871</a>

## 「北方」という郷土に生きる

—安倍佐市『入田付昔語集』をめぐって—

伊藤 龍 平

はじめに—「北方」とはどこか—

われわれは、東西南北の方角と、その先にある土地に対して、ある種のイメージを抱いてきたし、いまも抱いている。本稿は「近世日本における「北方」イメージ」をテーマとしているが、あらためて考えて、「北方」とはどこだろう。<sup>(1)</sup>

菊池勇夫は、近世以前の日本の北の境界線が「バウンダリー（線としての国境）」ではなく、「フロンティア（領域としての辺境）」だったことを指摘している。テッサ・モーリス＝鈴木も、「日本の北の境界線は当惑をもたらすほどに曖昧」だったと述べている。これらの見解の基底にあつたのは、フレデリック・ジャクソン・ターナーの論である。<sup>(2)</sup>

近世日本の「北方」は、日本という領域の「内」から「外」へと段階的に変化していく面として存在していた。北辺へと歩むうち、明確な境界のないまま、自文化はいつしか異文化へと変貌していく。それが近世日本における「北方」だった。

こうした「北方」の境界の曖昧さが、近世後期の工藤平助や林子平らの対露脅威論を生み、近代の日露戦争、そして

今日の北方領土問題へとつながる下地を作っている。現在の日本政府が領有権を主張している北方領土や、主権不在の地としている千島列島や南樺太に向けられた視線に、「辺境」としての「北方」の発想は生きている。

その「北方」＝北辺の「辺境」にも生活を営む人はいる。横山泰子は、近世以前の地図や地誌にしばしば現れる「小人島」について「小人島は境界領域の表象である。その住人は、日本と異国が混ざり合った混淆の地に暮らす者として描かれている」と指摘している。<sup>(3)</sup>それは「内」からの、「中央」からの視点だった。それでは、「辺境」に生きる人は、自分たちをどう語る（語った）のだろうか。そこでの語りは「中央」からの語りとどう異なり、どう関わるのだろうか。本稿のテーマに即していえば、そこに「近世」と「近代」という要素も加わる。「北方」を郷土として生きるとは、どういうことなのか。

会津という地域は、白河の関以北のいわゆる陸奥に位置し、戊辰戦争の敗北によって賊軍の汚名を着せられながらも、統治していたのは徳川一族の松平家だった。「中央」と「北方」の双方の顔を持っていたといえる。「北方」を捉えるには、「中央」との相関関係のなかで考えていかなければならないが、その意味でも、きわめて示唆的な地域である。

本稿では、近現代に、福島県会津地方に生きた安部佐市という人物と、その著作『入田付昔語集』を取り上げる。「北方」と「中央」の狭間で、「近世」と「近代」の狭間で揺れるアイデンティティを追うことにより、この問題について論じてみたい。

## 一、「蔵のおんつあ」と東北の近代

安部佐市という人物については、以前、別稿で書いたことがあるが、その後の調査で判明したことも追加して、あらためて簡述する。<sup>(4)</sup>

佐市は、明治二十一年（一八八八）、福島県耶麻郡岩月村入田付（現・喜多方市）の農家に生まれた。若いころの事績には不明な点が多いが、関東大震災（一九二三年）で妻子を亡くしたという証言があるため、東京・神奈川近辺に住んでいた時期があったらしい。本人も記しているが、福島県内で教員をしていた時期もあったようだ。晩年に入田付に戻ったあとは人を避け、蔵に籠り、読書と書写、執筆に明け暮れる日々を送っていた。自筆の絵を売ることがあったが、定業には就かず、親戚の家を頼っていた。周辺の住人からは「蔵のおんつあ」、または「蔵おんつあ」と呼ばれていたという。昭和四七年（一九七二）没、享年八十五。

福島方言の「おんつあ」は「おじさん」の意味だが、晩年の佐市と交流があった菊地眞洲男さんご夫妻によると、良いニュアンスではないという。<sup>(5)</sup> 敬意や親しみをこめて呼ぶときは「おんつあま」といい、「おんつあ」には軽い揶揄の気持ちが入っているとのこと。

伝えられるエピソードからは、厭世的でありながらも、自己顕示欲の強い人物像が浮かび上がってくる。さながら、現代の隠者。地域住人からは煙たがられる存在だった。残された著作からは、相当の知識人だったことがうかがえるのと同時に、圭角の多い筆致が目立つ。

佐市が生まれた明治二十一年（一八八八年）といえは、維新から二十年が経つが、彼の親の世代は、維新以前に人格形成を終えている。会津藩士の娘だったという佐市の母親は、昭和三年（一九二八）に七十八歳で没しているというから、生年は嘉永四年（一八五二）ごろ。<sup>(6)</sup> 農家だったという父親についての記述は少ないが、前近代に生まれたのは確かである。この時代を生きた人全般に当てはまる特徴だが、幼少期の佐市は、近世と近代の二つの価値観のなかで成長していった。学校教育は近代式、家庭教育は近世式である。そして近世の特色は、往々にして、近代になって認識されるものである。くだんの蔵には膨大な量の蔵書があったそうだが、現在は散逸してしまっている。蔵も現存しない。伝存する佐市の著作は以下の四点だが、後述するように、『入田付昔語集』には一九三七年筆の同名異本があり、それを加えると五点に

なる。いずれも壮年期の著作である。

『入田付昔語集』一九三二年 ※個人蔵（会津図書館に、上巻のみの別本あり）

『会津怪談集』一九三六年 ※会津若松市立会津図書館所蔵<sup>(7)</sup>

『入田付老人雑話』一九四一年 ※個人蔵

『野馬台詩講義』年次不明 ※会津若松市立会津図書館所蔵

前三者は、郷土・入田付の民間説話を集めたものである。文献資料（古文書、古典籍）によったものも多いが、佐市自身も土地の古老から聞き取りをして歩いている。その範囲は広範で、会津盆地全域にわたる。佐市が会った話者たちは、幕末ごろの生年と察せられる。収集されたのは、近世末期から近代にかけての話だった。著作のうち、『野馬台詩講義』は、預言書『野馬台詩』の注釈書『野馬台詩国字抄』（一七九七年）を書写したもので、いささか毛色が違うが、末尾には「大江山鬼の伝説」、「浦島太郎」（滝沢馬琴『燕石雜志』の書写）、「入田付錦の花」など、民間伝承にまつわる記事が並ぶ。

佐市の筆業で一貫してテーマとしてあったのは、自身が収集した民間説話を近代人の視点で解釈し、郷土である入田付を把握しようという意思である。一連の著作を通してうかがえるのは、佐市が「辺境」に生きることを自覚していたことと、「中央」に対して屈折した意識を持っていたことである。

東北人の近代意識に大きな影を落としているのが、戊辰戦争である。先に述べたように、佐市の母方の祖父は会津藩士で、若松落城の際に戦死しているが、戊辰戦争が東北人、とりわけ福島の人々のメンタリティーにあたえた影響は大きい。それは東北人に限らず、こんにちの「辺境」としての「東北」イメージへと連なっていく。

江戸▽松前、江刺▽東北Ⅳ蝦夷地（アイヌ社会）という序列を見出した河西英通は、こうした「東北」観が、近世後期から醸造されていたイメージの延長線上にあり、それが戊辰戦争によって強化され、固定化されたと指摘している。<sup>(8)</sup>

河西の言を借りれば、「天皇に刃向かう＝未開」という図式である。河西は、「近世後期における東北＝異境・異域イメージがあったればこそ、幕末維新期における奥羽越後列藩同盟の軍事的敗北は、東北にあらためて「未開」性を付与した」とし、これを「近代的未開」と呼んでいる。

福島県の人々の「中央」（あるいは薩長）への嫌悪感はいまでも強い。二十年ほど前のことだが、私も会津地方をフィールドワークしていたとき、同席した後輩が山口県出身だと知ったときの話者（当時八十代）の態度の豹変ぶりを目の当たりにしたことがある。そうした場面には何度も遭遇した。それは伝統的な感情ではなく、近代に生じたものだった。佐市という個性も、そうした会津戦争世代の二世として育まれた。

そう考えると、河西のいう「近代的未開」も首肯できる。ただし、「内」と「外」という点からいうと、奥羽越後列藩同盟の諸藩の人々も、自分たちが日本という枠組みの「外」にいるとは思っていなかった。日本の「外」ではなく、「内」のなかでの「外」に近い場所にいるという認識である。そのことは、奥羽越後列藩同盟が、北白川宮能久親王を盟主としたことから知れる。戊辰戦争は官軍と賊軍の戦いではない。双方とも官軍だったのだ。それはつまり、日本の「内」のなかでの争いだったということである。近世日本の「北方」における「内」と「外」の争いの例は、シャクシャインの乱（一六六九年）や、クナシリ・メシリの戦い（一七八九年）などの、アイヌと和人の衝突である。

この点は、「異境」という語を補助線として引くと、より明瞭になる。「辺境」が同一文化圏の内側の臨界点ならば、「異境」はその外部、つまり異文化圏にある（「文化の同一性」というのも虚構なのだが、論を明確化するために、ここではあえて極論を述べる）。佐市を始めたとした東北人は、自分たちが「辺境」に住んでいるとは認識していても、「異境」に住んでいるという認識はない。

しかし最初に述べたように、日本の北辺の「辺境」と「異境」の境は曖昧である。日本の「北方」が「バウンダリー（線としての国境）」ではなく、「フロンティア（領域としての辺境）」であるのなら、近世から近代の（おそらくは現代も）「東

北」とは「辺境」から「異境」へと濃淡を変えていく「北方」という領域として存在する。

そうした認識は、近世後期の「異境」＝蝦夷地の名称からも見て取れる。近世期のアイヌ居住地は、和人の居住地との距離から、北海道南部（道南）を指す「近蝦夷」「口蝦夷」、道央を指す「西蝦夷」「上蝦夷」、道東を指す「東蝦夷」「下蝦夷」へと曙染めに変化していき、樺太・千島を経て、ロシアを意味する「赤蝦夷」へと続く。「蝦夷」という語が指す領域と、日本人、アイヌ、ロシア人の居住地域に、明確な国境線はない。<sup>(9)</sup>

むろん「内」と「外」＝「辺境」と「異境」の差は、たんに地理的な点ばかりではない。時代は遡るが、『諏訪大明神絵詞』（一三五六年）には、蝦夷地とそこに住むアイヌについて、「其地外国ニ連テ、形体夜叉の如ク、変化無窮ナリ。人倫、禽獸魚肉を食トシテ、五穀の農耕を知らず。九沢ヲ重ヌトモ、語話ヲ通シ堅シ」という一節がある。<sup>(10)</sup> 言語をふくめた文化面の相違も大きな判断基準になった。

北方の「辺境」「異境」と、南方のそれとの差異はここにあるのではないだろうか。

赤坂憲男は「東西の軸に沿った比較がもたらす日本文化像」が「結局は「ひとつの日本」の懷に抜き取られる」こと、「だからこそ、南北の軸に立った、あらたな列島の民族史的景観が拓かれねばならず、それはまた、「いくつもの日本」に向けて組織される必然がある」と指摘している。<sup>(11)</sup> アイヌも沖縄も、日本人にとっては異文化であり「異境」である。しかし、沖縄の場合、琉球王国の支配領域という、比較的明確な国境線が想定できた。<sup>(12)</sup>

## 二、会津盆地の「北方」

次に、個人蔵『入田付昔語集』の第一話「紫雲山の子安観音、沼尻村渡部沼左衛門、昔かたり」の冒頭部分を引用する。<sup>(13)</sup>

昔、某將軍、陸奥征伐の途中、此処に差かゝつて、渡船を命ぜられると、「今日は早や二度の渡船が出た後だから、最う出すことが出来ぬ」と云ふ。將軍、聞て、「君の仰せを蒙つて、国の為に陸奥征伐の途に上る吾行路を邪魔するとは、甚だ以て怪しからぬ。鬼でもあれ蛇でもあれ、一矢で射殺しくれん。恐ることなく船を出せ」と命ぜられる。船頭、かしこまつて渡船を漕出すと、將軍は船の中央に突立つて弓に矢を番へて、待てゐられる有様に、流石の大蛇も將軍の威勢に畏れたか、舟は何事もなく向ふの岸についた。

話の流れにやや不自然な点はあるが、この後、夜中に、大蛇の化けた娘が將軍のもとを訪れるという、蛇智入り説話の展開になり、最終的には、寺社縁起として結ばれる。

主人公の「某將軍」は、「陸奥征伐の途中」という一節から、征夷大將軍・坂上田村麻呂のことだとわかる。田村郡・田村市という地名に名を残しているように、福島県では、寺社縁起や地名由来と結びつき、伝説上の人物として語り継がれている。なかには、田村麻呂が山を背負つてやってくるなど、神話的な色彩を帯びた話もある。<sup>(15)</sup>

説話のなかの田村麻呂は、常に、英雄として語られる。英雄が英雄であるためには、退治されるべき悪役が必要とされる。田村麻呂説話の大滝丸（「大多鬼丸」とも）がそれである。しかし、根岸英之も指摘しているように、郷土意識の高まつた現代では、田村麻呂は侵略者であつて、大滝丸こそ英雄であるところとらえる解釈も生じてきている。<sup>(16)</sup> この説話には、「中央」と「辺境」の相克がある。

加えて、田村麻呂説話の場合は、神話学でいうところの文化英雄としての側面も見出せるので、「文化」をもたられされた側の地域が、未開の地という扱いになつてしまふ点に留意したい。「中央」と「辺境」の相違が、無前提に文化差に置き換えられてしまふ。この図式を、地域住民自身も伝説の語りというかたちで、無自覚に受け入れていることが多<sup>(16)</sup>い。

佐市は「陸奥征伐の途中、此処に差かゝつて」と起筆し、その後も終始、侵略する者側の視点で筆を進めている。舞



台となった「沼尻」は現在の猪苗代町にあり、主人公の將軍が渡った川は長瀬川かその支流だと思われる。話が寺社縁起として終わるように、郷土の説話なのだが、にもかかわらず、佐市の視点は外部にある。この姿勢は『入田付昔語集』全編において貫かれているし、敷衍すると、佐市のみならず、郷土史家と呼ばれる人全般に共通する。<sup>(17)</sup>

「伝説は郷土の詩」（『会津怪談集』）であると書く佐市だが、「郷土」とは「中央」との比較のうえで見出されるものである。「郷土」を語ろうとすればするほど、「中央」に寄った語りになるという、アンビバレンツな関係にあるのだ。<sup>(18)</sup>

べつの話で、佐市は「会津の領土は狭いが、歴史は古い。従って、色々な伝説に富み、秋の夜なが話は尽きない」（七九話）と記しているが、こう書かれたとき、「大きな物語」である「中央」の歴史に、地域の伝説が組み込まれてしまっている。この記事を書いた時点での佐市は、入田付に戻っていたと思われるが、精神の上では「外」にいたのである。そして、外部に立つ佐市は、みずからの郷土を「北方」にあるものとも認識していた。

本来、方位というのは相対的なものである。例えば、村井紀が指摘しているように、南西諸島という行政名にも、日本側から見たときの方位がふくまれている。<sup>(19)</sup> 私が住んでいる台湾から見れば、南西諸島は北東の外れのほうにある島々である。「南西」という名づけに、日本の立場と思想が現れている。

しかし、奇妙といえば奇妙なことなのだが、南西諸島に住んでいる人たちにも、自分たちが「南方」に住んでいるという自覚がある。中央からの視点が、地方人のなかに内面化されているのだ。私は北海道出身だが、自身のことをふりかえってみると、やはり自分の故郷を北国だと認識していた。そして、地図上では北海道より南にある東北地方も「北方」とみなし、「中央」は東京だと認識している。故郷の北海道を「中央」とみなす発想はなかった。

そう考えると、本来は相対的であるはずの「北方」も、現実には絶対的なイメージを持たれているといえるかもしれない。いや、絶対的とは言いかねるにしても、固定的ではあるのではないだろうか。

ここで、佐市の故郷である入田付地区のもつ場所性に注目してみたい。

「入田付」という地名は、「田付」という土地への入り口を意味する語だが、近世にはすでに村名として定着していた。入田付村は、一八八九年に、近隣の町村と合併して、岩月村となる。佐市が著述活動をしていたのはこのころである。その後、さらに近隣の町村と合併して、岩月村は一九五四年に喜多方市の一部となり、現在にいたる。

いまは「喜多方」という字が当てられているが、もとの意味は「北方」、すなわち会津若松市から見て、北の方角に位置している土地を意味する語だった。会津盆地での「中央」は会津若松市（正確に言えば、若松城下）である。なお、「会津」というのは、中通り（福島県中央部）と新潟県の間にある広大な土地を示す語で、地元の人々は、会津若松市のことを「若松」と呼ぶ。

行政区分は、後天的に地域アイデンティティを作る。そのことは、植民地政策によって分割されたアフリカ諸国を例にすると分かりやすい。現在でこそ、入田付地区の住人は喜多方市民としてのアイデンティティを持っているが、佐市が著述活動をしていたころ、喜多方といえは、よその土地だった（入田付は、喜多方市街よりさらに北方にある）。

当時のこの地域における「地方」―「中央」の関係を整理すると、入田付（岩月）√喜多方√会津若松√東京……というグラデーションをなしているといえる。

もちろん、これにも時代差がある。現在ならば、会津若松と東京のあいだに郡山が入るだろう。だが、郡山市は、明治初期の開拓事業（安積開拓）によって急速に発展した町で、幕末の時点では人口五〇〇〇人ほどの宿場町だった。規模からみて、とても会津若松と東京の中間に置かれるような土地ではない。

以上のことを踏まえたうえで、佐市が故郷・入田付をどう見ていたのかを、『入田付昔語集』をひも解きながら確認してみたい。先に述べたように、会津図書館にも、同名異本の『入田付昔語集』があるが、上巻のみで下巻を欠いているので個人蔵のほうを対象とする。

稿末の表は、『入田付昔語集』の内容をまとめたもので、話数は概数である。

『入田付昔語集』の内容を区分すると、(1)伝説ならびに史話、(2)古跡の紹介とその由来、(3)民間習俗、(4)漢籍、(5)西欧の知識の披歴……といったところになる。いずれも、入田付に関する記事が中心になっており、これらの要素が混雑している場合もある。

佐市は、近世と近代の狭間で、「中央」との距離感のなかで、故郷・入田付を語っている。それはおそらく、佐市に特有の個性ではなく、地方に住みながら郷土を見つめようとする者（郷土史家）に、普遍的に見られるものだったろう。

表を一見して分かるように、類似事件・事故が並べられている。例えば、7～10話は山中の怪音に関する話、18～19話は不思議な軍勢の声に関する話、23～28話は落人伝説、31～35話は変事（飢饉、戦など）の前兆譚、36～45話は火事の記録……等々。一連の話の舞台となった時代は、近世から近代（佐市にとつての現在）まで幅がある。

説話集の配列には思想がある。『入田付昔語集』でも同様。佐市の筆には、入田付という地域を浮かび上げようとする意図がうかがえる。<sup>②①</sup>列挙されることによって意味を帯び、過去の事件・事故は、現在の事件・事故と関連づけられるのである。

### 三、井上圓了との対峙

『入田付昔語集』では、地域の家系伝承を、実名を挙げて記している。本書を紹介しにくいのは、住民のプライバシーに関わる記事が多いからである。その最たるものが、いわゆる落人伝説（23～28話）である。

入田付に限ったことではないが、落人伝説を有する家は、村落共同体のなかの内なる他者であり、「中央」との、そして「大きな歴史」（国史）との接点になりうる存在である。落人伝説の多くは貴種流離譚としての性質をもっており、そこから、自分たちの住む地域への評価の視点も生ずる。その点は、先に触れた英雄伝説とも通ずる。<sup>(21)</sup>

佐市自身も、みずからの家系伝承について記している。事実上の最終話八九話「拙家の古碑の事」という話がそれである（便宜上、表には九〇話として「入田付八景」を載せたが、実際は、入田付の名所を八か所、簡条書きにただけで、話とはいえない）。この前には、入田付の碑や墓所についての記述が並ぶ。

佐市が記すところによれば、先祖の安部義右衛門は、「奥州白川城主従四位侍従拾万石、安部伊勢守の息子、故ありて、六部となり諸国回行し、富入田付の我が家に來た」のだという。その後、同地で「久しく諸人を祈祷して居た」が、元禄年中に没したとある。その墓碑が現存し、「清和源氏の末流」だと書かれているとのこと。典型的な貴種流離譚である。上下二巻、九〇話前後に及ぶ『入田付昔語集』は、安部家の家系伝承ののち、「入田付八景」、そして「拙詠」（佐市の和歌三種）と続き、幕を閉じる。「中央」との接点を意識しながら、みずから収集した文献伝承、口頭伝承を紹介して郷土を浮かび上げらせ、そこに自身の家系を位置づけ、最後は郷土を詠み上げて終わる。そうした構成が見て取れる。それは民俗誌の記述に似た営みだといえる。

佐市には、間違いなくフィールドワーカーとしての資質があった。古老からの聞き取り、古文書の翻刻、漢籍の翻訳、古典籍の引用のほかに、当代の学術書を参考にした記述もある。佐市の著述活動がもつとも旺盛だった一九三〇年代は民俗学の勃興期であり、郷土運動の最盛期でもあった。柳田國男の影響を受けていても不思議はないし、展開次第では合流することもあり得たはずだが、著作を読むかぎり、その形跡はない。

当代の学者のなかで、佐市が意識していたのは、井上圓了のほうだった。参考までに記すと、圓了の生年は一八五八年で、佐市より三〇歳年長。佐市の親の世代に当たる。没年は一九一九年で、佐市が一連の著述活動をしていたころには、すでに故人だった。

次に引用するのは、『入田付昔語集』の七話「山奥にひそむ怪異」の一節である。

今日、科学の進歩に依つて不可解は解かれある。<sup>(ママ)</sup>又、昔から不思議と言ひ伝ひられてゐることも科学の力で不思議と云ふ名もとりに去られある。<sup>(ママ)</sup>然るに、今迄見たことも聞いたこともない不可解があるから不思議でならない。今此処に話す題は、山に生活の経験ある人でなくては一寸理解が困難かもしれない。

場所は会津郡耶麻郡一ノ木村を北西へ約二里程に、藤巻といふ極山間の僻地の部落がある。小生は、其部落の家庭学校の教員になつて居たことがあるが、不思議なことは、天狗の唐木倒し（カラキタホシ）である。

此の部落へ毎夕六時ごろとは正確に言はれないが、出現する日は不定期ですけれども、約六時頃になれば、どこの家でも、米研ぎをする時刻です。誰言ふともなく、「アア、キタキタ。あ、あの木」だと指を差して見てゐる。指を差された巨木を見ると、突然、烈風がまき起ると、見る間に全山鳴動し、其の反響たるや、万雷一時に落ちる。以上の音響は誰しも恐れない人は無い。其の周囲の草木は烈風雷動の中に在つて、少しも揺れもしなければ、動きもしない。

（中略）

何う考へて見ても、空気的作用ではない。色々考へたも皆駄目だ。<sup>(ママ)</sup>人間の能力で、大自然の神秘をあばく事は出来ない。

現在（一九三〇年代）を「科学の進歩に依つて不可解」な現象が解明されていく時代としている。結論は正反対になるが、前提となつてゐるものは圓了の妖怪学と変わらない。近代人の立場で、当代、および前近代の事象を解析しようという圓了の思想は、佐市の思考と通ずる。『入田付昔語集』と同時期に書かれた『会津怪談集』は、幽霊妖怪を題材とした話が多いため、圓了に言及した箇所も多い。次に該当箇所を列挙する。

井上円了の易は天と人との観応にて占事、的中すると説明す。左にあらず。的中するは凡人の業にあらず。修道の功、神は達す者。  
 (『会津怪談集』第三十四話)

天狗の怪異は多く深山にあり。かゝる怪事は昭和の今日、インテリゲンチャーには迷妄とか妄談とかにて一笑するならんも、物は経験、実験なくば其の心理に近づく事不能。妖怪博士・井上円了すら天狗・幽霊は全部主観的心理作用と説明、「妖怪は概て心理作用なり」と発表するは、不完全の説明なり。心霊学より、幽霊必ずあり、天狗の怪異必ず深山にあり。然共、天狗は面赤く鼻高にて、山伏の如きは確実たる信をかす。(『会津怪談集』第三十六話)

井上円了の如き、「妖怪は皆心理作用にて此の世に不思議、妖怪は無し。迷妄の愚者なり」と説明すれ共、余は心理的理解のみ信ぜず。今此処に話す題は、山に生活の経験ある人でなくては判らぬが、深山には天狗の虚木倒しと云ふ不思議がある。  
 (『会津怪談集』第三十八話)

佐市が圓了の書物を読んでいたことは疑いないが、別稿では、それ以外の接点の可能性として、圓了の講演旅行を挙げておいた。『南船北馬集』第一六編によると、一九一〇年に、圓了は、耶麻郡(現・喜多方市)で講演をして<sup>(23)</sup>いる。当時二十二歳の佐市がその講演を聞いた可能性はある。だが、会津図書館所蔵の『入田付昔語集』(上巻のみ。下巻は欠本)の奥付によると、それとはべつに接点があった可能性も浮かび上がってくる。

会津図書館所蔵『入田付昔語集』の後書には、「昭和十二年二月五日原稿再写完了 福島県耶麻郡岩月村入田付 編述者 元三島中淵門人 井上円了門人 東洋大学志那哲学専修 安部佐市」とある。三島中淵という人物については不詳、郷土史家かもしれないが、「元……門人」というのが気になる。

目を引くのは「井上円了門人 東洋大学支那哲学専修」という個所である。若年期の佐市が東京近辺に在住していたらしいことは先に述べたが、この記述を信するならば、東洋大学在籍中に、圓了と知遇を得た可能性がある。東洋大学の前身・哲学館の設立は一八八七年にまで遡るが、「東洋大学」という名称が使用されるのは一九〇六年からで（学令によって認可されるのは一九二八年）、圓了の没年は一九一九年。そうすると、佐市が東京に滞在していた時期も絞られてくる。「門人」を名乗る以上、ある種のシンパシーを感じていたのは間違いないが、佐市の文章を読む限りでは心服していたとも取れない。むしろ反発のほうを強く感ずる。それは「中央」の学者によって「辺境」たる「郷土」が意味づけされていくことへの苛立ちであつたろう。

ただし、東洋大学に確認したところ、同大学の卒業生名簿に、安部佐市の名は確認できないとのことで、この点については、今後の課題としておく。

#### 四、近世奇談集『老嫗茶話』

佐市は、蔵の外ではフィールドワークと文献調査に明け暮れ、蔵に籠つては書物を読み、思索し、書きつづけた。それらの著作は、誰に向かつて書かれたもののなのだろう。

個人蔵の『入田付昔語集』の奥付に相当する部分には、「昭和七年二月原稿複写 上下式冊共出版御届中 安部佐市」とある。「複写」という点に元原稿の存在が暗示されていて、推敲を重ねていたことがうかがえる。会津図書館所蔵の同名異書の存在がその証左である。「出版御届中」というからには、公刊の意図もあったらしい。佐市の筆遣いには、明らかに読者意識がうかがえる。『会津怪談集』や『入田付老人雑話』の奥付にも同様のことが記されている。しかし、ついに著作は刊行されることはなく、自筆稿本のままに終わっている。



生前のエピソードを仄聞するかぎり、周囲に、佐市の話し相手となる人物はいなかった。当然、読者となるべき人も近くにいない。先に、若いころの佐市が東京近郊に住んでいたらしいと書いたが、一連の著作の読者は、都市住人を想定していたのだろう。そのほかに、佐市の著作の理想的な読者であり、話し相手は、古人のなかにいたとおぼしい。

『入田付昔語集』をはじめ、一連の佐市の著作には、自身が収集した口碑のほかに、文献資料から引用された話も少なくない。ただし、古典籍を除けば、それらの文献の多くが所在不明である。入田付の名を冠した書物（『入田付古今雑考』、『入田付旧事覚』、『入田付古記録』、『入田付昔の面影』）は、佐市自身の著作の可能性もある。

そうしたなか、『老嫗茶話』を典拠とした六話と『会津怪談録』を典拠とした七二―七四話は、ともに会津地方の怪談集からの引用という点で興味深い。この両著は『会津怪談集』でもよく引用されている（書名は似ているが、『会津怪談集』は佐市の著作で、近世後期成立らしい『会津怪談録』とは別の書である<sup>(25)</sup>）。佐市お気に入りの著作とみていい。

『会津怪談録』の来歴については不明な点が多いが、『老嫗茶話』については、高橋明彦による研究がある<sup>(26)</sup>。編者は会津藩士の三坂春編で、寛保二年（一七四二）の成立。『入田付昔語集』から遡ること二百年ほど昔である。序では、雨夜に庵を訪ねてきた「近くの老嫗・村老」から聞いた話を集めたと記している。共通点の多い両著の比較をしてみたい。

高橋は、『老嫗茶話』の諸話を以下の八つに分類している——(a)中国系奇談、(b)会津系奇談、(c)雑史系奇談、(d)由井正雪、(e)征伐系切支丹話、(f)来朝系切支丹話、(g)雑話筆記、(h)武辺咄、(i)有職故実。そのうえで、とくに最初の三つ、中国系奇談、会津系奇談、雑史系奇談を『老嫗茶話』の中核をなすものとみなしている。

右の八種のうち、(a)と(e)は海外の説話で、(b)は郷土の説話である。(c)と(d)は「中央」の「大きな歴史」に関する説話。編者の三坂春編がどこまで意図していたかは知れないが、収録された説話には、地域的な広がりや時代的な広がりがあり、そのなかで、いやがおうにも「会津」という地域が浮かび上がってくる。このスタンスは『入田付昔語集』ともよく似ている。



先に、『入田付昔語集』の諸話を、(1)伝説ならびに史話、(2)古跡の紹介とその由来、(3)民間習俗、(4)漢籍、(5)西欧の知識の披歴、の五つに分類してみた。これを『老嫗茶話』の諸話と比較してみると、どうなるか。

『老嫗茶話』にあつて『入田付昔語集』にないものは(e)「切支丹話」だが、代わりに(5)「西欧の知識の披歴」がある。『老嫗茶話』の(h)「有職故実」も『入田付昔語集』にはないが、(3)「民間習俗」が、伝統的な知識の披歴という点でそれに相当するといえはいえる。だが、それ以外の要素は、おおよそ共通する。(b)「会津系奇談」はもちろん、(a)「中国系奇談」は漢籍からの引用というかたちで、(g)「武辺咄」も古典籍からの引用というかたちで、『入田付昔語集』にも見出せる。郷土の説話を集めた『老嫗茶話』、『入田付昔語集』には、このように、自文化より上位に位置づけられる文化や、「大きな物語」である中央の歴史と、「北方」の「辺境」である自分たちの郷土を紐づけようという意図がある。<sup>(27)</sup>おそらくそれは偶然ではなく、故郷が故郷として見いだされるとき一つの法則なのだろう。

また、近世と近代の、二人の会津地方の奇談集の著者にはバーソナリティー上の共通点も多い。佐市が近代的隠者とでも呼ぶべき人物だったことは先に述べたが、(信憑性に疑問はあるものの)浪人だったとされる春編も、『老嫗茶話』の序に、みずからを「辺隅幽栖柴扉散人」と号している。雅号で隠者を自称するのは文人の伝統だとしても、会津盆地で文筆活動をしていたらしい春編の場合は、単なるポーズ以上の感情が読み取れる。

『老嫗茶話』の序では、話の提供者である老人たちについては「もとよりいやしき村老や姥の茶吞かたりなれば、虚妄の説のみにして十に壺ッもとる所なしといへども」と書き記す。郷土への愛着と選民意識。このスタンスは安部佐市と同質のものである。

同じく、序に付せられた春編の「さみしさもおなしこゝろの友もかな雨にふけゆくねやの灯」という歌も、『入田付昔語集』の末尾に置かれた三首の歌「我が業は知らぬ山田の目くら蛇人に見られてうたれこそすれ」、「奥山に時を忘れぬ山桜さけば都の花に劣らじ」、「あす見んと思ふ心は山桜夜半の嵐に散るぞ悲しき」の心境に通ずる。孤高を守ろうとす

る矜持と、朋輩を求める気持ちとが複雑に絡み合い、「中央」との相関関係のなかで、「辺境」である郷土への誇りと結びついているのである。<sup>(28)</sup>

佐市が、『入田付昔語集』を結ぶにあたり、自身の家系伝承について記したことにについてはすでに述べたが、春編も『老嫗茶話』を編むにあたって、自身の家の始祖である三坂越前守隆景に関する話を二話、載せている（巻二の「山寺の怪」、巻四の「山伏悪霊」）。この点について、高橋は「説話の伝承において『老嫗茶話』は、三坂家にとって単に三坂春編一個人に帰する事の出来ない家系的な連関を有していた事が推察される」としている。<sup>(29)</sup>そこには、自己の家系を、郷土と同様に特化させようという意識がうかがえる。

では、『入田付昔語集』において、『老嫗茶話』はどのように引用されているのだろうか。

『入田付昔語集』六話「山奥の鬼婆々」は、会津から米沢へと向かう二人連れの旅人が、行き暮れて泊まった宿の老婆が、舌長姥という妖怪だったという話。そこに朱の盤坊という妖怪も現れる。「一つ家伝承」と呼ばれる話型である。話の末尾近くで「『老嫗茶話』より」と典拠が明らかにされているが、その後「それから、其の旅人は米沢城下へ辿りつきまして、この話をしたと、今も南置賜郡三沢村入田沢にて昔語りに伝ふ」と結ばれている。山形県南置賜郡三沢村（現・米沢市）は、福島県に隣接しており、入田付を越えてすぐなので、『入田付昔語集』に引用されるのは妥当のようにも思われる。

しかし、『老嫗茶話』の原話「舌長姥」では「越後より武蔵野へ登りける旅人」の話とされており、道行きが異なる。話の舞台の「諏訪千本の松原」が、現在の会津若松市内の諏訪神社付近を指すなら、入田付からはかなり遠い。これが事実なら類話があったことになるが、一方で、佐市による改変の可能性もある。改変もふくめた受容をされてきた作品だった。

『日新館誌』巻二十の「老嫗茶話十六卷」の項には、「本藩の古老、怪を語り児曹に教ゆるは、大抵、此書を本に云ふ」と記されている。この一節について、高橋は、近世後期、会津藩内において、『老嫗茶話』が「今日我々の予想以上に」

流布していたことを想定している。<sup>(30)</sup> 会津藩士の孫である佐市が『老嫗茶話』に親しんでいたのも不思議ではない。

なお、朱の盤坊という妖怪は、『諸国百物語』（一六七七年）にも登場する。『老嫗茶話』でも、出典を明らかにしたうえで、『諸国百物語』を紹介している。『諸国百物語』は、書名のとおり、諸国咄型の怪談集で、版元は京の菊屋七郎兵衛。内容は同じであっても、地元民である三坂春編によって編まれた地域密着型の怪談集『老嫗茶話』に載る話とは、そこに向けられる視線が異なる。『諸国百物語』では「辺境」の話として、『老嫗茶話』では「郷土」としての扱いを受けている。この話をさらに引用した『入田付昔語集』では、そこに近代という視点も入ってくるのである。<sup>(31)</sup>

### おわりに——「同郷人」の見た「北方」——

「北方」へのアプローチの仕方には、いくつかの立場がある。試みに、柳田國男の『民間伝承論』で提言されたフィールドワーカーの三つの立場、「旅人の学」、「奇遇者の学」、「同郷人の学」を参考に考えてみる。<sup>(32)</sup>

「旅人」の立場での「北方」へのアプローチは、松尾芭蕉の『おくのほそ道』のようなケースである。柳田はこの立場からの考察は皮相的だとして批判的だが、「旅人」だからこそ見えてくるものもあるはずで、一概に問題とはいえない。ただ、「旅人」の立場での地域伝承の収集は、ともすれば「中央」との相違点にばかり目が行き、奇事異聞に走りやすいのは事実である。

「奇遇者」の立場でのアプローチとは、菅江真澄のような例である。三河出身の真澄は、東北各地から北海道を巡り歩いたが、ベースは秋田に置いていた。定住したエトランゼである只野真葛『奥州ばなし』もここに入れられよう。真葛は江戸生まれだが、父・工藤平助は仙台藩士で、『赤蝦夷風説考』を著し、ロシアの脅威と「北方」警備の重要性を説いた。真葛は、「中央」「辺境」「異境」のグラデーションが見えていただろう。

「同郷人」の立場でのアプローチとは、鈴木牧之のような例である。郷土研究を標榜する柳田は、この立場をもっとも重視している。しかし、先に述べたように、この立場の場合でも「中央」からの視点が記述者の身体に内面化されているケースが多い。牧之の場合、青年期に知った、江戸の人々の雪国の暮らしに対する無知がカルチャーショックとなり、それが後年の『北越雪譜』へとつながる。

『老嫗茶話』の三坂春編や、『入田付昔語集』の安部佐市は、第三の「同郷人」の立場である。それぞれの立場の差異については、慎重な検討が必要とされよう。また、佐市の場合、明治の青年特有の立身出世主義や「煩悶」の要素も指摘できる。<sup>(33)</sup>しかし、ここで言えるのは、いずれの立場でも「北方」観に相違が少ないということである。ステレオタイプの強さについては、社会学の方面からの言及もある。

現代においては、「北方」観にも変容が起こりつつある。「辺境」においては郷土意識の高まりが、「異境」においては民族意識の高まりが見られることにより（アイヌなど）、自分たちの立ち位置を利用した語りがなされるようになってきているからである。<sup>(34)</sup>

そのとき、「北方」に生きる人々の語りも変容していくだろうし、それを受け止める「中央」の人々の眼差しも変わっていくものと推察される。

## 注

(1) 本稿は、法政大学国際日本学研究所主催シンポジウム「近世日本における北方イメージ」（二〇一七年七月二三日）での報告「『辺境』に生き、「辺境」を語る―会津の奇人と近世説話」をもとにしている。

(2) 菊池勇夫「境界・辺境から「日本」を問う」\*『東北学』四、二〇〇一年、東北芸術工科大学東北文化研究センター  
テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める―アイヌが経験する近代』二〇〇〇年、みすず書房

- (3) 横山泰子「小人島はどこにあるのか」\*『文学』一六―一六、二〇一五年、岩波書店
- (4) 伊藤龍平「蔵の中の近代―『会津怪談集』と妖怪博士」\*『怪異を歩く』（怪異の時空Ⅰ）二〇一五年、青弓社
- (5) 菊地眞洲男氏（一九三六―）は入田付在住の郷土史家で、農業を営むかたわら故郷にまつわる著作を刊行している。佐市と親交が深かった父親の芳男氏（一九〇二―一九二二）も文人気質の人で、『入田付老人雑話』の翻刻（抜粋）を『岩月町小史―古事と民話・伝説』（岩月町地域協議会編、岩月町おこし委員会、二〇一一年）に載せている。
- (6) 『入田付昔語集』より。この記事が確かなら、佐市は母親が三七歳のときの子ということになる。遅い出産だが、菊池氏の証言によると、佐市は三男とのことである。
- (7) 『会津怪談集』については、左記拙稿を参照。
- (8) 伊藤龍平「翻刻『会津怪談集』」\*『澁谷近世』一八、二〇一二年、國學院大學近世文学会
- (9) 河西英通『東北―つくられた異境』二〇〇一年、中央公論社
- (10) この点について、米家志乃布は「他者である異民族の住む地域」を意味する「蝦夷地」という名称そのものが「和人側の地理的認識を示したものであることを指摘している」。
- (11) 米家志乃布「近世日本における庶民の「蝦夷地」像―刊行図と節用集所蔵の地図を中心として―」\*『法政大学文学部紀要』七二、二〇一六年
- (12) 『続群書類従』第三輯ノ下巻第七十三、一九三三年、続群書類従完成会
- (13) 赤坂憲男『東西／南北考―いくつもの日本へ』二〇〇一年、岩波書店
- (14) 「辺境」としての琉球については、小林ふみ子による左記論考がある。小林は、近世日本の知識人の関心が「日本に感化された国としての琉球」にあったと指摘している。
- (15) 小林ふみ子「支えにされた琉球」\*田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』二〇一五年、笠間書院
- (16) 以下、『入田付昔語集』、『会津怪談集』の本文は、私に翻刻したものを用いる。
- (17) 田村郡における田村麻呂伝説については、左記を参照。
- (18) 伊藤龍平編『福島県田村郡都路村説話集』二〇一五年、私家版

- (15) 根岸英之「福島県大滝根山山麓の田村麻呂伝承―近世と現代のテキストにみる敗者たち」\*『説話・伝承学』一、一九九三年、説話・伝承学会
- (16) 佐々木馨は、史実に根差す「歴史的伝説」の例として田村麻呂を挙げ、「民話的伝説」と対置させている。また、佐々木は北方伝説の特徴をいくつか挙げているが、そこで「辺境／中央」の問題や、「蝦夷Ⅱアイヌ」の問題にも触れている。
- (17) 佐々木馨「北方伝説の誕生―歴史と民俗の接点」二〇〇七年、吉川弘文館
- (18) 飯倉義之が指摘しているように、共同体のなかでは特殊な伝承者である郷土史家は、一方で、スタンダードな伝説を作る立場でもあった。佐市の場合、郷土史家としては機能していなかったが、メンタリティー的には、それに近かったといえる。
- (19) 飯倉義之「史料としての郷土史家―フィールドの中の郷土史家」\*『世間話研究』一一、二〇〇一年
- (20) 「郷土」概念の近代性については、成田龍一による指摘がある。
- (21) 成田龍一「『故郷』という物語―都市空間の歴史学」一九九八年、吉川弘文館
- (22) 村井紀「南島イデオロギーの発生―柳田国男と植民地主義」一九九二年、福武書店
- (23) 「入田付昔語集」で用いられたこの手法は『会津怪談集』でも採用される。
- (24) 伊藤龍平「蔵の中の近代―『会津怪談集』と妖怪博士」
- (25) 貴種流離譚・落人伝説は、社会機能の側面からも考察が可能である。すなわち、源氏の系統が支配する現実世界に対するアンチテーゼとして、平家の落人伝説を捉える発想である。
- (26) 「入田付昔語集」八六話「入田付の古碑」は論文調の文体で、末尾には「大編集者研究発表」と記されている。同じく八七話「造墓の動機とその変遷」でも、末尾に「編者研究発表」とある。これが実際に発表原稿なのか、佐市による諧謔なのかは現時点では不明である。
- (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) (101) (102) (103) (104) (105) (106) (107) (108) (109) (110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129) (130) (131) (132) (133) (134) (135) (136) (137) (138) (139) (140) (141) (142) (143) (144) (145) (146) (147) (148) (149) (150) (151) (152) (153) (154) (155) (156) (157) (158) (159) (160) (161) (162) (163) (164) (165) (166) (167) (168) (169) (170) (171) (172) (173) (174) (175) (176) (177) (178) (179) (180) (181) (182) (183) (184) (185) (186) (187) (188) (189) (190) (191) (192) (193) (194) (195) (196) (197) (198) (199) (200) (201) (202) (203) (204) (205) (206) (207) (208) (209) (210) (211) (212) (213) (214) (215) (216) (217) (218) (219) (220) (221) (222) (223) (224) (225) (226) (227) (228) (229) (230) (231) (232) (233) (234) (235) (236) (237) (238) (239) (240) (241) (242) (243) (244) (245) (246) (247) (248) (249) (250) (251) (252) (253) (254) (255) (256) (257) (258) (259) (260) (261) (262) (263) (264) (265) (266) (267) (268) (269) (270) (271) (272) (273) (274) (275) (276) (277) (278) (279) (280) (281) (282) (283) (284) (285) (286) (287) (288) (289) (290) (291) (292) (293) (294) (295) (296) (297) (298) (299) (300) (301) (302) (303) (304) (305) (306) (307) (308) (309) (310) (311) (312) (313) (314) (315) (316) (317) (318) (319) (320) (321) (322) (323) (324) (325) (326) (327) (328) (329) (330) (331) (332) (333) (334) (335) (336) (337) (338) (339) (340) (341) (342) (343) (344) (345) (346) (347) (348) (349) (350) (351) (352) (353) (354) (355) (356) (357) (358) (359) (360) (361) (362) (363) (364) (365) (366) (367) (368) (369) (370) (371) (372) (373) (374) (375) (376) (377) (378) (379) (380) (381) (382) (383) (384) (385) (386) (387) (388) (389) (390) (391) (392) (393) (394) (395) (396) (397) (398) (399) (400) (401) (402) (403) (404) (405) (406) (407) (408) (409) (410) (411) (412) (413) (414) (415) (416) (417) (418) (419) (420) (421) (422) (423) (424) (425) (426) (427) (428) (429) (430) (431) (432) (433) (434) (435) (436) (437) (438) (439) (440) (441) (442) (443) (444) (445) (446) (447) (448) (449) (450) (451) (452) (453) (454) (455) (456) (457) (458) (459) (460) (461) (462) (463) (464) (465) (466) (467) (468) (469) (470) (471) (472) (473) (474) (475) (476) (477) (478) (479) (480) (481) (482) (483) (484) (485) (486) (487) (488) (489) (490) (491) (492) (493) (494) (495) (496) (497) (498) (499) (500) (501) (502) (503) (504) (505) (506) (507) (508) (509) (510) (511) (512) (513) (514) (515) (516) (517) (518) (519) (520) (521) (522) (523) (524) (525) (526) (527) (528) (529) (530) (531) (532) (533) (534) (535) (536) (537) (538) (539) (540) (541) (542) (543) (544) (545) (546) (547) (548) (549) (550) (551) (552) (553) (554) (555) (556) (557) (558) (559) (560) (561) (562) (563) (564) (565) (566) (567) (568) (569) (570) (571) (572) (573) (574) (575) (576) (577) (578) (579) (580) (581) (582) (583) (584) (585) (586) (587) (588) (589) (590) (591) (592) (593) (594) (595) (596) (597) (598) (599) (600) (601) (602) (603) (604) (605) (606) (607) (608) (609) (610) (611) (612) (613) (614) (615) (616) (617) (618) (619) (620) (621) (622) (623) (624) (625) (626) (627) (628) (629) (630) (631) (632) (633) (634) (635) (636) (637) (638) (639) (640) (641) (642) (643) (644) (645) (646) (647) (648) (649) (650) (651) (652) (653) (654) (655) (656) (657) (658) (659) (660) (661) (662) (663) (664) (665) (666) (667) (668) (669) (670) (671) (672) (673) (674) (675) (676) (677) (678) (679) (680) (681) (682) (683) (684) (685) (686) (687) (688) (689) (690) (691) (692) (693) (694) (695) (696) (697) (698) (699) (700) (701) (702) (703) (704) (705) (706) (707) (708) (709) (710) (711) (712) (713) (714) (715) (716) (717) (718) (719) (720) (721) (722) (723) (724) (725) (726) (727) (728) (729) (730) (731) (732) (733) (734) (735) (736) (737) (738) (739) (740) (741) (742) (743) (744) (745) (746) (747) (748) (749) (750) (751) (752) (753) (754) (755) (756) (757) (758) (759) (760) (761) (762) (763) (764) (765) (766) (767) (768) (769) (770) (771) (772) (773) (774) (775) (776) (777) (778) (779) (780) (781) (782) (783) (784) (785) (786) (787) (788) (789) (790) (791) (792) (793) (794) (795) (796) (797) (798) (799) (800) (801) (802) (803) (804) (805) (806) (807) (808) (809) (810) (811) (812) (813) (814) (815) (816) (817) (818) (819) (820) (821) (822) (823) (824) (825) (826) (827) (828) (829) (830) (831) (832) (833) (834) (835) (836) (837) (838) (839) (840) (841) (842) (843) (844) (845) (846) (847) (848) (849) (850) (851) (852) (853) (854) (855) (856) (857) (858) (859) (860) (861) (862) (863) (864) (865) (866) (867) (868) (869) (870) (871) (872) (873) (874) (875) (876) (877) (878) (879) (880) (881) (882) (883) (884) (885) (886) (887) (888) (889) (890) (891) (892) (893) (894) (895) (896) (897) (898) (899) (900) (901) (902) (903) (904) (905) (906) (907) (908) (909) (910) (911) (912) (913) (914) (915) (916) (917) (918) (919) (920) (921) (922) (923) (924) (925) (926) (927) (928) (929) (930) (931) (932) (933) (934) (935) (936) (937) (938) (939) (940) (941) (942) (943) (944) (945) (946) (947) (948) (949) (950) (951) (952) (953) (954) (955) (956) (957) (958) (959) (960) (961) (962) (963) (964) (965) (966) (967) (968) (969) (970) (971) (972) (973) (974) (975) (976) (977) (978) (979) (980) (981) (982) (983) (984) (985) (986) (987) (988) (989) (990) (991) (992) (993) (994) (995) (996) (997) (998) (999) (1000)

高橋明彦「老嫗茶話」の諸本」\*『近世文芸』五六、一九九二年、日本近世文学会  
 高橋明彦「老嫗茶話」追考―作者補説および日新館旧蔵散逸本など―」\*『都大論究』三〇、一九九三年、東京都立大学国語国文学会

(27) この問題を敷衍させると、華夷思想の問題に行きつく。華夷秩序のなかで、近世日本の知識人がどのように論を展開させていたかという点については、左記の論がある。

大木康「『夷』の国の学問―漢学と国学」\*田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』二〇一五年、笠間書院

田中優子「組み入れられる蝦夷」\*田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか―江戸から見る自意識の変遷』

(28) なお、三坂春編は、話の舞台であり、自分たちの土地である会津を一樣なものとは見ていない。具体的にいうと、『老嫗茶話』には、加藤氏・蒲生氏統治時代の話が多く、春編にとつての同時代である、松平氏統治時代の話が少ない。この点について、佐々木長生は、加藤氏・蒲生氏の統治時代が「若松城下の建設・発展の時代」であることに説明を求めている。佐々木の見解にも首肯できる点はあるが、私は、怪異の起こる時代を、一時代前に設定することによって、フィクション性を担保する効果があると見ている。

佐々木長生「『老嫗茶話』にみる近世会津の民俗風景」\*『福島県立博物館紀要』二七、二〇一三年、福島県立博物館

(29) 高橋明彦「老嫗茶話」追考―作者補説および日新館旧蔵散逸本など―」(注26)

(30) 高橋明彦「老嫗茶話」追考―作者補説および日新館旧蔵散逸本など―」(注26)

(31) なお、『諸国百物語』所収の「会津須波の宮、首番と云ふばけ物の事」という話は、登場する妖怪は同じだが（こちらでは「首番」と表記されている）、内容はまったく異なり、昔話「こんな顔」の話型となっている。『諸国百物語』は、左記に翻刻がある。

太刀川清校訂『百物語怪談集成』（叢書江戸文庫2）一九八七年、国書刊行会

(32) 柳田國男『民間伝承論』一九三四年、共立社

(33) 明治期の青年特有の精神構造については先学による研究の蓄積があるが、ここではとくに右の二著を挙げておく。

E.H. キンモンス 著、広田照幸ほか 訳『立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ―』一九九五年、玉川大学出版部

(34) 和崎光太郎『明治の〈青年〉——立志・修養・煩悶——』二〇一七年、ミネルヴァ書房

岩本由輝は、比喩的な意味で「世界各国にはそれぞれ「東北」が存在し、とくに近代になるとそこが辺境として位置づけられる普遍性」があるとしている。この場合の「東北」は「異境」ではなく「辺境」の意味だが、両者をふくめて「北方」であることは先に述べた。

岩本由輝「憶説・「東北」論——辺境が自己主張する条件——」\*『エコノミスト』六三卷一七



## 『入田付昔語集』各話一覧

	題名	時代	地域	備考・引用元
1	紫雲山の子安観音、沼尻村渡部沼左衛門、昔かたり	昔	沼尻村	「蛇女房」 寺社縁起
2	紫雲山の子安観音に付き、他に一説の昔かたりあり	むかし	入田付沼尻	龍女（主） 竜宮伝説
3	藤六の城址	建久二年	入田付沼尾前	金鶏伝説
4	鶏の宵鳴き	戦国時代	入田付村	化け猫譚
5	青面大王	昔	田付	山鳥の報恩
6	山奥の婆々	「何時の頃かわかりません が」	田付	『老嫗茶話』
7	山奥にひそむ不思議	大正～昭和?	耶麻郡一ノ木村	天狗倒し、佐市の体験
8	天狗の三斧、深山の怪事	明治三十年頃	入田付村治里 部落	『斎諧記』
9	山中の怪音	晋永嘉五年	中国	山中に軍勢の音
10	鎮守の森の囃し	文政のはじめ	入田付村治里 部落	山中に囃子の音
11	会津四家合考より	戦国時代	北方（喜多方）	『会津旧事雑考』
12	入田付村殿林山の事	戦国時代	入田付村	『入田付古今雑考』
13	大橋、小橋の合戦	戦国時代	入田付	家系伝承
14	光徳寺過去帳之裏ニ記シアリ	戦国時代	入田付	史話・伊達政宗
15	愛宕の峯の松風	戦国時代	入田付村治里	史話・伊達政宗
16	古戦場の怪	戦国時代	入田付	軍勢の声
17	古戦場の怪	戦国時代	遠州三形ヶ原	軍勢の声
18	古戦場の怪	不明	中国	軍勢の声、『輟耕録』『博物誌』
19	高館の城跡	不明（現代?）	奥州高館	軍勢の声
20	光徳寺縁起	天正年間	入田付	各種の古文書
21	覚（同雑考ヨリ）	寛文五年ほか	入田付村入沼 野原	『入田付古今雑考』
22	入田付有家名	なし	なし	同地の名字について
23	矢口四郎兵衛の事	慶安～明和	入田付沼尻	『入田付旧事覚書』 落人伝承、家系伝承
24	畠山六郎右衛門の事	不明	平沢村	落人伝承、家系伝承
25	三浦藤左衛門の事	不明	入田付村	『入田付旧事覚書』 落人伝承、家系伝承
26	渡部儀左衛門	戦国時代	入田付沼尻	落人伝承、家系伝承
27	安倍義右衛門	不明 （戦国時代?）	入田付	落人伝承、家系伝承 ※佐市の先祖
28	永井氏	不明	入田付村?	『入田付旧事覚書』
29	惣社大明神の事	仁寿三年	耶麻郡入田付 南原	「古記録」を引用
30	入田付伏見稲荷大明神	元文二年以前	入田付治里北 作	「口伝」から。
31	不動尊の御霊託 ※二話から成る	嘉永二年 嘉永四年	入田付	『入田付古記録』
32	安倍谷吉宅の怪異	明治七、八年 頃	入田付大川入 新田	「古老の昔談」、『おあん物語』『老人雑話』
33	西土之怪異	不明	中国	『太平広記』

	題名	時代	地域	備考・引用元
34	入田付沼の不思議	近世以降	入田付	「古老の話」
35	若松城中の怪事	会津戦争の頃	会津若松	「足輕を勤めし人の話」
36	出火の事	元禄三年	入田付西原	火事の記録
37	平沢火事	元禄元年 元禄五年	入田付村	火事の記録
38	杉山火事	元禄八年	入田付？	火事の記録
39	西原火事	元禄十三年	入田付？	火事の記録
40	大風	元禄十二年	入田付？	台風被害の記録
41	大水	嘉永二年 正徳二年	入田付？	洪水の記録
42	杉山火事 ※ 38 話とは別の話	正徳二年	入田付？	火事の記録
43	治里火事	正徳三年	入田付？	火事の記録
44	川入火事	享保十三年	入田付？	火事の記録
45	西原火事 ※ 39 話とは別の話	享保十六年	入田付？	火事の記録 『入田付旧事覚書』
46	神木を伐りて狂死の事	嘉永年中	入田付沼尻	『入田付昔の面影』
47	五郎作宅にて三宝荒神崇りありし事	宝永年中	入田付村治里	『入田付昔の面影』、『続斎諧記』
48	石灯籠の霊	元禄年中	相模国小田原	「古書」、『左伝』
49	入田付村治里火事	弘化元年	入田付村治里	「老人の語り伝え」 放火事件の記録
50	同治里火事	明治三十三年	入田付治里	火事の記録
51	地震、水風	享保八年 正保元年 延宝元年 元禄八年 元禄十二年	河沼郡	地震、洪水の記録
52	大雪、大水	元文二年 元文三年	入田付	『入田付旧事覚書』
53	入田付沼堤の発端の事	正保三年以降	入田付	『入田付同覚書』
54	怪事	天明三年	入田付	『入田付昔の面影』
55	天変月色	天明三年	入田付	『入田付昔の面影』
56	天明の飢饉	天明三年	入田付？	飢饉の記録
57	寛文五年書状之覚	寛文五年	入田付？	金山に関する文書
58	園桜稲荷由来 ※二話から成る	元和元年	入田付 字上 平 平	「古老ノ昔話」 『三国妖婦伝』
59	五雑俎に左の如し	不明	中国	『五雑俎』、『酉陽雜俎』、『述異記』、『聊齋志異』
60	安倍明レ晴の事	不明	不明	安倍晴明、藤原道長
61	大江匡衡之事	不明	不明	
62	平沢山正福寺縁起	天正五年	耶麻郡 入田付 邑字平沢	古文書の和訳
63	会津盛衰記より抜記	戦国時代	北方（喜多方）	『会津盛衰記』
64	旧九月廿三日の夜、入田付西原にて餅を搗く事	天正年間	入田付	『入田付昔の面影』
65	入田付邑愛宕山大権現縁起	天正十二年	入田付	『入田付旧事覚書』
66	盛隆生害事	不明	入田付？	『檜原軍物語』

	題名	時代	地域	備考・引用元
67	入田付村沼山貴船明神由来	元暦元年	耶麻郡入田付村沼山	『入田付旧事覚書』
68	入田付村沼尻紫雲山不動明王縁起	仁治三年	耶麻郡入田付村沼尻	古文書
69	入田付村沼尻紫雲山清瀧寺由来記	弘長元年	入田付邑	『当院開山由来』
70	仏殿建立棟札	正徳五年	入田付	清瀧寺過去帳からの写し
71	清瀧寺境内	各種	入田付	古文書
72	円城寺彦九郎、古貉を射る事	不明	江戸・会津藩屋敷	『会津怪談録』家系伝承
73	赤星村、猫の妖怪の事	元禄年中	北方赤星村	『会津怪談録』類話の紹介
74	空中に妖形を見し事	延享年間	磐梯山、飯豊山	『会津怪談録』
75	磐梯山破裂後、空中にて異形を見し事	明治二十一年	磐梯山	「佐藤栄次郎老人、その他の人」からの聞き書き
76	会津神奈川、八百比丘の事	昔	会津神奈川村	「入田付若菜作八翁談」
77	人魚の事	宝永年中	若狭国大飯郡	『諸国怪談録』、『洞冥記』、『齋諧記』
78	印の杉	不明	和州三輪	『諸国怪談録』、『日本記』、『旧事記』
79	太用寺仇討物語り	不明	耶麻郡岩月村	「佐藤常七老人談」
80	田村山の妖怪の事	不明	田村山村、鈴瀬村	『会津怪談録』
81	捜神後記より抜記	不明	中国	『捜神後記』
82	大沼原の美女のうらみ	戦国時代	大沼原(入田付)	「若菜作八談」
83	入田付殿館の猫の妖怪の事	不明	入田付	『入田付御城地物語』
84	三森源右衛門、古貉を斬りし事	不明	会津若松城下?	『会津怪談録』
85	齋藤金兵衛屋敷の事	不明	会津若松城下?	『会津怪談録』
86	入田付の古碑	なし	入田付	末尾に「大編集者研究発表」とある。「墓の通俗説明」というレポートも。
87	造墓の動機とその変遷	なし	入田付	86話の続き。末尾に「編者研究発表」とある。
88	古墳の相	なし	中国	前二話を享けて。『蘇東坡詩集』
89	拙家の古碑の事	元禄年中	入田付	佐市の先祖
90	入田付八景	なし	入田付	「小沢円吉翁口伝」

<ABSTRACT>

**To live in the "North" as home :  
about Saichi Abe's "Iritatsuki Mukashigatarisyuu"**

ITO Ryohei

"North" means to the remote boundary of the north, which is a concept confronting "center".

In the early modern period, Japan's "North" existed as a gradation of changing the shade from "inside" to "outside" of the state. In the north of Japan, there was no clear line defining the borders, the area was just spreading out.

I wonder how the people living in the remote border of the north recognized themselves. How is the recognition different from the recognition from "center" and how is it involved?

In the theme of this paper, elements of "early modern" and "modern" are necessary for consideration.

In this paper, I will take up a person named Saichi Abe, who lived in the Aizu of Fukushima Prefecture, and his work "Iritatsuki Mukashigatarisyuu".

I would like to discuss this issue by chasing the identity that shakes in the interval between "early modern" and "modern" in the interval between "northern" and "central".